

アルフレッド・ド・ミュッセ

研究ノオトより

—抒情體挽歌「四季の夜」略解—

近藤 等

フランス・ローマン派の絢爛と咲き競う詩歌の花園に、眞珠のごとく美しい、青春の花々を、また憂愁の花々を咲かせたアルフレッド・ド・ミュッセ (Louis Charles Alfred de Musset 1810~1857) の詩は、ふつう二つの時期にわけ考察せられてゐる。第一期は一八二九年から一八三三年まで、第二期は一八三四年から一八五一年までであり、その境をなすものは、シヨルジュ・サンドとの戀愛事件である。閨秀作家サンドとの戀愛事件は、「ヴェニス」の戀」として有名なるものであるが、二人がはじめて知合つたのは、一八三三年の六月のこと、當時サンドは二九歳、ミュッセはまだ二三歳であつた。二人は強烈な戀の美酒に酔つて相携へ、イタリアの水都ヴェニスへ旅立つたのであつたが、運命の神は、二人の幸福をねたみ、ミュッセは、翌年の四月、ただ一人、踰越として、故國に歸つたのである。しかし、サンドとの戀愛の失敗の深刻な痛手は、彼をして不朽の詩人たらしめる結果となつた。このアヴァンテールを一大轉機として、彼の藝術は、赤心を吐露した眞摯さを示し、彼自らが経験した戀のよろこびと悩みを歌ひ、詩風は

さらに悲痛と絶望の暗翳が加わつて、いよいよ深刻な光輝を放つに至つたのである。そうした第二期の所産たる詩の中から、四つの「夜の歌」の詩を解説を試み、その内容を傳へてみたい。

詩人は今二五歳である。サンドとの戀愛事件に失敗した彼は、一時、まづたく絶望状態にあつた。後年、彼は當時を回想して、「私のパンセは、まるで枯葉のごとく、すべて落葉してしまつた。だが、やがてのこと、私の心には、なにかしら未知な、ものがなくも優しい感情が起つてきた」と語つてゐる。ミュッセは、一八三五年の最初の四月間はほとんど筆をとらなかつた。だが、サンドとの破局が決定的なものになると、詩作に没頭することによつて、慰安を見出そうとしたのである。

ある日のこと、ミュッセはパリーに春の芳香がたちのぼるのを感じ、チュルリーの庭園のマロニエの木蔭で、「五月の夜」(La Nuit de Mai) の著想を得たのである。

La Muse

Poète, prends ton luth et me donne un baiser ;
La fleur de l'églantier sent ses bourgeons éclore.
Le printemps nait ce soir ; les vents vont s'embrasser ;
Et la bergeronnette, en attendant l'aurore,
Aux premiers buissons verts commence à se poser.
Poète, prends ton luth, et me donne un baiser.

ミュッセ

詩人よ、琴を手に取り、愛を贈りよ。

野天の、花はさとりぬ

かたき木の芽のほくくるを。

この夕べ春はおとすれ、風ぬるし。

黎明を、待ちがてに體體

初線、若夜に、宿りはじむる

詩人よ、琴いだけ、接吻けよ

彼はわが家に歸り、その夜まんじりともせず詩作に熱中し、次の日も、その夜も筆を離さなかつた。ミユツセは十二箇のろうそくを燈し、大きく開かれた窓から流れくる春の微風を感じながら、詩的ミヌテイシステムによつて「五月の夜」を書きあげたのである。

この詩は詩の女神ミユーズと詩人との對話形式になつてゐるが、詩人は、いまだ彼の失戀の傷手から治つてはいない。すると、詩神が彼の前に現われて、またたき琴をとるようになすすめ、ちぢかきにその詩興をそよめるのである。

Poète, prends ton luth ; la nuit, sur la pelouse,

Balance le zéphyr dans son voile odorant.

La rose, vierge encor, se referme jalouse

Sur le frelon naçré qu'elle énivre en mourant.

écoute ! tout se tait ; songe à ta bien-aimée.

Ce soir, sous les tilleuls, à la sombre ramée

Le rayon du couchant laisse un adieu plus doux.

Ce soir, tout va fleurir : Pimmortelle nature

Se remplit de parfums, d'amour et de murmure,

(51)

Comme le lit joyeux de deux jeunes époux.

詩人よ、琴いだけ、草生が上

夜は香ばしき帳がなかに微風を揺する。

酔い痴れる眞珠母色が蜂の上、

清らけき花そらび、うとましや身を閉する。

聞けよかし！ものみな沈黙、おんみが戀人を夢みよ。

今宵、菩提樹が下、小暗き梢の繁みに、

落陽はいとも優しき残暎を宿す。

今宵、なべては花咲きて、永遠の自然は

うら若き夫婦の樂しき床のこと、

香に満ち、愛に満ち、はた睡やきに満てり。

だが、詩人の方では、彼を勧誘するミユーズが、彼の物語を聞いてくれないのではないか、むしろ、彼の惱む心を無遠慮に探らうとしてゐるのではないのかと氣づかうのである。詩人は、己の告白によつて再び心の傷手が開くことをおそれ、彼の悲しい思ひ出によつて語ることを強請しないうちに頼む。するとミユーズは、そつした氣持では毛頭なうごとを主張し、物好きからではなく、彼を慰める友として、彼の告白をききたいと語るのである。詩人の心の傷手のうえに、二人が交わす音楽は、芳香をふりまいてくれるだらうと語りきかせるのである。

Poète, prends ton luth ; c'est moi, ton immortelle,

Qui t'ai vu cette nuit triste et silencieux,

Et qui, comme un oiseau que sa couvée appelle,

Pour pleurer avec toi descends du haut des cieus.
Viens, tu souffres, ami. Quelque ennui solitaire
Te ronge, quelque chose gèmi dans ton cœur ;
Quelque amour t'est venu, comme on en voit sur terre.
Une ombre de plaisir, un semblant de bonheur.
Viens, chantons devant Dieu ; chantons dans tes pensées.
Dans tes plaisirs perdus dans tes peines passées ;

詩人よ、奉いだけ、この悲しく静けき夜半、
おんみを眺めしはわれなり、おんみが神にこそ、
舞によほゆるる心鳥のこと
おんみや翼かんと、天の高みより降りしわれなり。
いぢ、友よ、おんみは心苦しむ。寂しき悲歎を
おんみが心を苦しませり。おんみが心に何ものか呻めけり。
現世にあらんことを、愛戀がおんみに起れり、
そは喜悅の影にして幸福に似たるもの、
いぢや、神の御前におんみが心を、
失われしおんみが喜悅を、越し方の苦惱を歌わん。

わのニソトースは彼を旅へるところが駄目である。

Partons, dans un briser, pour un monde inconnu,
Eveillons au hasard des échos de la vie,
Parlons-nous de bonheur, de gloire et de folie,
Et que ce soit un rêve, et le premier venu.
Inventons quelque part des lieux où l'on oublie ;
Partons, nous sommes seuls, l'univers est à nous.

Voici la verte Ecosse et la brune Italie,
Et la grèce, ma mère, où le miel est si doux,
Argos, et Pelion, ville des héraclombes,
Et Messa la divine, agreable aux colombes ;
Et la front chevelu du Pelion changeant ;
Et la bien Tyarèse ; et la golfe d'argent
Qui montre dans ses eaux, où le cygne se mire,

接吻のうち、見知らぬ邦へ旅立たん。
徒然におんみが玉の緒の反響を喚び起さん。
幸福につき、榮譽につき、狂熱につき語らん、
夢にてもあれ、來たれるなべてのものをこそ
忘れられし邦邦を見いださん。
旅立たん、われら孤獨なれど、宇宙はわれらがもの。
こゝ、緑のスコットランド、栗色のイタリア、
蜜のげにも甘き、わが母なるギリシア、
アルゴ、殺戮の町ブレテオン
鳩らに心地よき聖地メッサ、
移ろいしメリオン山の髪多き額、

碧きタイタレヒス

白鳥己か姿を映す白銀の入江、

右の章句にでてる美しい地名は、作者たるシニツセが
地誌を参照して書きつらねたものではなく、詩人のイマジ
ナシヨンの産物であるとA・クラヴゾーは述べている。シ
ニツセは、このような光景を喚起すれば、意氣沮喪してし

る彼を救ひ出し、その致命的な苦惱から慰撫することなど
きまつて考へるのであるが、詩人は、もはや、そのれの詩
作の力は去つてしまつたと答へるばかりである。

Je ne chante ni l'espérance,
Ni la gloire, ni le bonheur,
Hélas ! pas même la souffrance.
La bouche garde le silence
Pour écouter parler le cœur.

われは思ひて、希望も、
榮華も幸福も、
おなごわれ、苦惱やぐも。
心が言の葉を聞かんがため
口は沈黙を専らなり。

詩人の沈黙を前にして、ミユースはなまも懇願する。
Crois-tu donc que je sois comme le vent d'automne,
Qui se nourrit de pleurs jusque sur un tombeau,
Et pour qui la douleur, n'est qu'une goutte d'eau ?
O poète ! un baiser, c'est moi qui te le donne,
L'herbe que je voulais arracher de ce lieu,
C'est ton oisiveté ; ta douleur est à Dieu.
Quel que soit le souci que ta jeunesse endure,
Laisse-la s'élargir, cette sainte blessure
Que les noirs séraphins t'ont faite au fond du cœur ;
Rien ne nous rend si grands qu'une grande douleur.

Mais, pour en être atteint, ne crois pas, ô poète,
Que la voix ici-bas doit rester muette.
Les plus désespérés sont les chants les plus beaux.

おんみは思ひや、われは墳墓にまで涙を飲み、身を養ひ、
悲哀として一滴の涙なる秋風なりと。
おお詩人よ！一度の接吻、そをおんみに興うるはわれなり。
われ此處より摘みとらんとせし草は、
おんみが聞取なりき。おんみが苦惱は神にあり。
おんみが青春が忍びし懸念はいかなるものにておめれ、
悲しげなる天使がおんみの心の奥になせし、
この聖なる傷をば廣くらせよ。
大いなる苦惱に傷りて、われらを癒くものなし。
さわれ、そがために詩人よ、な思ひそ
現世におんみが聲は黙すべきと。
げにもはかなき絶望こそ、最も美わしき唄なり。

そしてミユースは詩人にペリカン鳥の悲壯な父性愛を例
證し、彼の悲しき戀を語り、人の子の心の糧にするように
すすめるのであるが、詩人はもう耐えられなくなつて、叫
び聲をあげて終るのである。

O Muse ! spectre insatiable,
Ne m'en demande pas si long.
L'homme n'écrit rien sur le sable.
A l'heure où passe l'aiguillon,
J'ai vu le temps ou ma jeunesse

Sur mes lèvres étair sans cesse
 Prête à chanter comme un oiseau ;
 Mais j'ai souffert un dur martyre,
 Et la moins que j'en pourrais dire,
 Si je l'essayais sur ma lyre,
 La direrait comme un roseau.

おと、ミューズ、飽くを知らぬ幻影
 かくも長く、われにそをなまそ。

人は砂上にはなにも書かじ。

朔風吹き荒むとき

われは知れり、わが若き血潮

常にわが唇に來りて、

小鳥らのごと唄わんとせしかの時ぞ、

されど、われは苦き苦痛を受けたりき、

われもしそをわが琴にたくしなば、

わがひとくそりの言の葉ぞ、

琴は蘆のごと碎け折れん。

「五月の夜」は一八三五年六月五日に「兩世界評論誌」(Revue des Deux Mondes)に發表されたものであるが、全體を讀むと、二つの泉が、清澄な水と、薄暗い水を、混合することなしに結合させているような印象をうける。その一つは詩人の片意地な、悲痛な魂であり、今一つは、自然と人生に向つて開かれた青春の心である。「五月の夜」の中で、詩人はまだ自分の苛酷だつた殉難を歌うのを欲しな

つたが、やがてはミューズの示唆をうけられることになるのである。詩人の兄ポオル・ド・ミューセは、この「五月の夜」は、詩人の智的且精神的健康に對し、決定的な鎮痛劑をもたらしたと述べている。今五月の夜を書き終ると、ミューズとの最初の接吻に癒されたものごとく、アルフレッドは彼の傷が完全にふさがつた、そしてもし再び開くならば、それは詩趣豊かに開くであらうと私に語つた。すづれにせよ、この作品は、彼の文學生活、私生活の兩方面において一時期を果したものであるのは事實であつて、彼はこの年の暮に第二の夜「十二月の夜」の中で、自分の胸中をいま一度吐露したのである。

「十二月の夜」(La Nuit de Décembre)はミューズとの對話ではなく、過去を回想する詩人のものがない獨語である。

Du temps que j'étais écolier,
 Je restais un soir à veiller
 Dans notre salle solitaire.
 Devant ma table vint s'asseoir
 Un pauvre enfant vêtu de noir
 Qui me ressemblait comme un frère.

われいまだ學びの座にありし頃
 一夜寂しき書齋に居残りて
 ひとり夜をば更かしぬ。
 兄弟のごとわれに似し

黒衣をまとえる衰れな兒。
わが草子の前に來たり坐しぬ。

彼はかくのごとく小學生の頃から回想をはじめ、もの心つく年頃、最初の失恋、放蕩に身を崩す年頃、最後に、絶望的な旅人だつた當時を回想して歌うのである。

Partout où, le long des chemins,
J'ai posé mon front dans mes mains,
Et sangloté comme une femme ;
Partout où j'ai, comme un mouton,
Qui laisse sa laine au buisson,
Sentir se danner mon âme ;

Partout où j'ai voulu dormir,
Partout où j'ai voulu mourir,
Partout où j'ai touché la terre,
Saur ma route est venu s'asseoir
Un malheureux vêtu de noir,
Qui me ressemblerait comme un frère.

道すがら、わが額を双腕にうづめ、
女人のごとくへ降り泣きし到る所、
灌木が茂みて羊毛を殘す羊が、いと
わが靈魂が盡くるを感ぜし到る所、

われが眠らんとせし到る所、
死なんとせし到る所、
大地に觸れし到る所、
兄弟のごとわれに似し
黒衣をまとえる不幸な男
わが行く手に來たり坐しぬ。

この引用句の最後の三行に歌われているように、詩人は兄弟のように自分に似た、黒衣をまとつた未知らぬ男が自分の傍に常に現われるのをみて、そのおそろしい幻覺を前にして戦くのである。ミッセ自身、シヨルジュ・サンドと戀愛關係にあつた頃、既にフォンテスプロオを散歩していた時かかる幻影に悩まされて、サンドの不快の種となつた事實があつたが、この「十二月の夜」はハイネの「二重人格」(Der Doppelgänger)の影響をうけたものとされてゐる。ミッセン・シロオは、この現象について、ミッセがヘルギオシオン公邸でハイネと意見を交換したことを明らかにしてゐる。

「十二月の夜」の中でも、この悪夢のような幻影は消えてはまた現われ、詩人を悩ますのである。詩人はもうたまたまなくなつてたのである。

Qui donc es-tu, spectre de ma jeunesse,
Pèlerin que rien n'a lassé ?
Dis-moi pourqu'oi je te trouve sans cesse,
Assis dans l'ombre où j'ai passé.

Qui donc es-tu, visiteur solitaire,

Hôte assidu de mes douleurs ?

Qu'as-tu donc fait pour me suivre sur terre ?

Qui donc es-tu, qui donc es-tu, mon frère,

Qui n'apparais qu'au jour des pleurs ?

そもおんみは誰ぞ、わが青春の幽靈、
疲勞を知らぬ巡禮か？

語りきかぜよ、何故にわが過きり來し闇の中へ

われおんみが坐しけるを見つひくるかぜ、

そもおんみは誰ぞ、寂しき訪問者、

わが苦惱につきまといふ客人か？

到る所われに従うは何ぞなせし故ぞ、

そもおんみは誰ぞ、そも誰ぞ、

悲しみの日にのみ現われぬ兄弟か？

すると最後に幻影は己のヴェールをとつて名乗りをあげ
るのひかる。

La vision

—Ami, notre père est le tien.

Je ne suis ni l'ange gardien,

Ni le mauvais destin des hommes.

Ceux que j'aime, je ne sais pas

De quel côté s'en vont leurs pas

Sur ce peu de fange où nous sommes.

Je ne suis ni dieu ni démon,

Et tu n'as nommé par mon nom

Quand tu m'as appelé ton frère :

Où tu vas, j'y serai toujours,

Jusques au dernier de tes jours,

Où j'irai m'asseoir sur ta pierre.

Le ciel m'a confié ton cœur.

Quand tu seras dans la douleur,
Viens à moi sans inquiétude.

Je te suivrai sur le chemin ;

Mais je ne puis toucher ta main,

Ami, je suis la Solitude.

幻影

——友よ、われらが父はおんみが父なり。

われは守護の天使にあらず、

はた世の人々の悪しき運命にも。

われは知りて、この現世にありて

愛しき人人の歩み、

何處に去り行くかぜ。

われは神にあらず、はた悪魔にも、

それど、おんみはわれをわが名にて呼べり、

おんみが兄弟ぞ、

われ常におんみが行く處に在らん。

おんみ生命の終る日、

おんみが墓石に坐り行くまで。

天はおんみが心をわれに托し給えり。

おんみ苦惱に處るとわが、
安んじてわれに來たれ、

われ路上におんみの伴侶となりん。
されどわれはおんみが手に觸るる能わず、
友よ、われこそは「孤獨」なり。

ミニッセが苦惱のエピキュリアンのごとく現われているこの「十二月の夜」は「兩世界評論誌」に一八三五年十二月一日に發表されたが、この詩の中に「ああ、弱き女、無分別な高慢女よ！」と歌つてゐる女性は、ジョルジュ・サンドではなく、一八三五年にミニッセと親交のあつた女性であり、戯曲「燭臺」の中のジャクリヌ、中篇エムリーヌの中の同名の女主人公のモデルとなつた女性である。この詩の中で、ミニッセがびつこの倦怠となづけている、彼の神經衰弱の最初の徴候が現われていることを注意せねばならぬ。

翌年になつて、「六月の夜」は書かるべくして書かれなかつた。最初の四行を詩人が書いた時、友人のアルフレッド・タテが二、三人の仲間と夕食に誘ひにきたので、この詩は中絶せられ、翌日になると、ミニッセはつづけて書く氣分になれなかつた。ミニッセが再びミュージズを呼んだのは、八月のことであり、それは希望を歌つた詩で、再び詩人とミュージズの對話形式になつた「八月の夜」(La Nuit d' Août)であつた。「八月の夜」はミニッセにとつて、げにも魅惑的な夜であつた。彼は自分の書齋をすつかり飾りたて、窓を思い切り大きく開き、室内にともされたろうそくの光は、花のいつばいささつた大きな花瓶の間にゆらめ

ていた。そしてミュージズは花嫁のごとく姿を現わしたのである。

ミュージズはまず詩人が自分から遠ざかつてゐることを咎め、優しく歎くのである。

Ton cabinet d'étude est vide quand j'arrive ;
Tandis qu'à ce balcon, inquiète et pensive,
Je regarde en rêvant les murs de ton jardin,
Tu te livres dans l'ombre à ton mauvais destin.
Quelque frère beauty te retient dans sa chaîne.

われ來たるとき、おんみが書齋は空なり。

われこの露臺にありて、落つかぬ物思ひにふけり、

夢見つおんみが庭の壁を眺むるとき、

おんみは闇中、惡しき運命に身を委ぬるなり。

高慢なるおん美女、鎖もておんみを引止めぬ。

高慢なるおん美女とは一體誰をさしているのであらうか。こゝではジョルジュ・サンドでも、當時ミニッセが知合つた町娘のベルヌレット(本名をルイズといひ、中篇フレデリックとムルレットの主人公となつた女性)でもなく、ミュージズがさしているのは、ベルギオジオゾ公爵夫人である(モリス・ドノイの説)とみるのが正しき。

Helas ! mon bien aimée, vous n'êtes plus poète.
Rien ne reveille plus votre lyre muette.

Vous vous noyez le cœur dans un rêve inconstant ;
Et vous ne savez pas que l'amour de la femme
Change et dissipe en pleurs les trésors de votre âme.

あわれ！ わが愛する者よ、おんみはもはや詩人にあらず。
おんみが黙せる琴を日覺めちよなごものおんはやなし。
おんみは移らぬ男を夢に心を縛らば、
女性の戀愛が、おんみが心の籠をば、
涙のうごに戀を敵らすことを知りず。

ミューズのこれらの言葉は、實は詩人ミユッセの母親の
言葉であり、兄ボオルの言葉であり、あるいは友人の言葉、
詩人自身の良心の言葉とみて差つかえあるまい。そしてミ
ューズは、そのかみの幸福な日々を、アンドレ・シェニエ
の詩を読み、夢想にふけりつつパウロ・ニユの森を散歩し
た頃を思い出すせるが、詩人は愛し且惱まなければ氣がす
まなすのであらう。

O Muse ! que m'importe ou la mort ou la vie ?
J'aime, et je veux palir ; j'aime et je veux souffrir ;
J'aime, et pour un baiser je donne mon génie ;
J'aime, et je veux sentir sur ma joue : maigrie
Ruisseler une source impossible à tarir.
J'aime, et je veux chanter la joie et la paresse,
Ma folle expérience et mes soucis d'un jour,
Et je veux raconter et répéter sans cesse

Qu'après avoir juré de vivre sans maîtresse,
J'ai fait serment de vivre et de mourir d'amour.
Dépouille devant tous l'orgueil qui te dévore,
Cœur gonflé d'amertume et qui t'es cru fermé.
Aime, et tu renatras ; fais-toi fleur pour éclaire,
Après avoir souffert, il faut souffrir encore ;
Il faut aimer sans cesse, après avoir aimé.

おお、ミューズ！ 死、はた生はなんぞ、
われは戀し、蒼をめたし。戀し、苦しむ。
われは戀し、一度の挨拶に、わが才を興えん、
われは戀し、潤るるを知らぬ泉、
わが瘦せし頬を流るるを感じたし。

われは戀し、喜悅と安逸と、
わが愚なる経験、はた一日の心勢を唄いたし。
はた絶え間なく語り繰返したし
戀人なくて生くるを誓ひし後、
戀に生か、戀に死ぬる誓いを立てしぞ。

苦惱に充たされし心、おんみに閉ざれしと思ひし心よ、
おんみを滅ぼす高慢をものみなより取去れよ。
戀せよ、しからはおんみ魅えらん。花となりて咲け。
苦しみし後も、われらなち苦しむべし。
戀せし後も、たえず戀するべかり。

二六歳のミユッセは、たえず誰かを愛していなければならぬのだつた。戀愛こそ、彼の心の要求であり、その戀愛には涙と苦しみが伴奏する必要があつたのである。ミユッセにとつて、戀愛とは幸福の探求でも、肉體の結合でもなく、詩的サディズムによる苦惱への不斷の狂おしい行程なのであり、苦惱こそ、彼をして、その最も美しい詩を書かせたものなのである。してみれば、ミユッセとしてはこの神聖な詩の泉を保持し、その苦い水に己の心を洗め、しかる後、海綿のごとく、その心をわれわれの眼前にしぼりだしたのである。彼の詩にかぎらず、全作品は、彼の戀愛生活と切り離して考へることはできない。彼の詩は、ミユッセ自身の惱める心の信仰なのであり、ミユッセは、その神であると同時に、誠實な司祭、はたその犠牲者でもあるのだ。

この年の十月十五日に、ミユッセは「十月の夜」(La Nuit d'Octobre)を書きあげたが、このシユーズとの詩話詩と「夜の歌」の最後のものであり、もつとも美しい傑作である。一八三五年の五月に最初の「夜の歌」をつくつて以來、この一八三七年の十月までの間に、ミユッセはエメー・ダルトンと戀仲になり、この新しい戀によつて、これまでの失戀の傷手は癒されたのだつた。詩人はまず、そのことについて歌いだすのである。

Le mal dont j'ai souffert s'est enfui comme un rêve.
je n'en puis comparer le lointain souvenir

Qu'à ces brouillards légers ne l'aurore souleve,
Et qu'avec la rosée on voit s'évanouir.

わが惱みし災禍は霧のなか消え去りぬ。
そが遠き朝の光に出づ

はれゆく黎明の狭霧
消えてもとなき露に似たと見え。

心の平靜をとりもどした詩人は、冷靜な氣持になつて、これまでの自分の苦惱の物語をしま一度シユーズに語り出すのである。

Oui je veux vous ouvrir mon âme,
Vous saurez tout, et je vais vous conter
Le mal que peut faire une femme
Car c'en est une. ô mes pauvres amis
C'est une femme à qui je fus soumis,
Comme le serf l'est à son maître.

さなり、われは、おんみにわが魂を開かんと欲す、
おんみはなべてを知るべし、われおんみに語りん、
一人の女性が爲し能う災禍をば、
實にそは、おお、わが哀れな友びとらよ、そは一人の女ゆえなりき、

そは、農奴がその主人に従うがごと、
わが仕えし女ゆえなりき。

なんら怨恨の氣持もなく過去を語りつとした詩人であつたが、ひとたび琴を奏せばはじめるよ、そのかまひのことがあまりにもあまりと眼にうかたせまじ、氣持はあのみと激しつくるのである。

C'était, il m'en souvient, par une nuit d'automne,
Triste et froide, à peu près semblable à celle-ci ;
Le murmure du vent, de son bruit monotone,
Dans mon cerveau lassé berçait mon noir souci.
J'étais à la fenêtre, attendant ma maîtresse ;
Et, tout en écoutant dans cette obscurité,
Je me sentais dans l'âme une telle détresse,
Qu'il me vint le soupçon d'une infidélité.

われは袖い出し、そは今宵にも似たも、
悲しくもうすら暮の秋の一夜なりき。
風が枝やききは、そが單調なる響めて、
わが疲れし脳髓にわが暗き憂鬱を揺がしぬ。
われは窓に凭りて、わが戀人を待きいたりしが、
闇に耳を敬てし
深き苦惱を胸に覚え、
戀しき女の心變りを疑いはじめぬ。

遂に詩人は、自己を仰えきれなくなつて、心の嵐を爆發せしめるのである。

Tout à coup, au détour de l'étroite rueille,

J'entends sur le gravier marché à petit bruit.....
Grand Dieu ! préservez-moi ! je l'aperçois, c'est elle ;
Elle entre. — D'où viens-tu ? Qu'as-tu fait cette nuit ?
.....

En quel lieu, dans quel lit, à qui souriais-tu ?
Perfide ! audacieuse ! est-il encor possible
Que tu viennes offrir ta bouche à mes baisers ?
Que demandes-tu donc ? par quelle soif horrible
Oses-tu m'attirer dans tes bras épuisés !
Va-t'en, retire-toi, spectre de ma maîtresse !
Reñtre dans ton tombeau, si tu t'en es levé ;
Laisse-moi pour toujours oublier ma jeunesse,
Et, quand je pense à toi, croire que j'ai rêvé !

にわかに、狭き露路が曲り角に
砂利踏む小刻みの登音を耳にしぬ.....
神よ！ われを護り給え！ われは見たたり、そは彼女なりき。
彼女は入り來たりぬ——君は何處より來たるや？ この一夜なにせしか？
.....

いかなる場所の、いかなる臥床にて、君は誰人に微笑みしか？
不實者！ あばずれ者よ！ わが接吻に、
君は今もなお唇をさしだし得るや？
君が求むるは何ぞ？ いかなる恐るべき渴望もて疲れし君が腕
にわれを誘わんとするか？
去れ、退げよ、わが戀人の幽霊！
君が迷い出でし墓場に歸れ。

わが若き日を永遠に忘れぬぞよ、
はた、君を想う時、そは夢の人なりとわれに思わしめよ！

ミユースは心配でたまらなくなつて、彼をなだめようとす。

Apaise-toi, je t'en conjure ;
Tes paroles m'ont fait frémir.
O mon bien-aimé ! ta blessure
Est encor prête à se rouvrir.

われ、おんみに懇願う、心を鎮めよと、
おんみが言の葉はわれを戦慄かせり。
おお、わがいとしき者！ おんみが傷は、
いまや再び開かんとす。

しかし、ミユースの言葉も、過ぎし日の戀の傷手に再び身を投じた詩人を引止めることはできない。ミユースは、彼を宥らにみちびき、忘却にみちびくうとし、生きるための種々の理由を申し立てるが、それも詩人の激怒を爆發させるのに役立つばかりで呪詛の言葉が吐かれるのである。

この「十月の夜」を書くにあつても、ミユースは自分の部屋を美しく飾り立てたであらうが、このたび燈された十二箇のろうそくは、ヴェニスの戀人がとち込められている葬龕の週りに輝く、教會の十二の大ろうそくであつたのだ。詩人とミユースは、すばらしいミサを歌う。まず詩人

が詠詞を讀しつゝするのとき。

Honte à toi qui la première
M'as appris la trahison,
Et d'honneur et de colère
M'as fait perdre la raison !
Honte à toi, femme à l'œil sombre,
Dont les funestes amours
Ont enseveli dans l'ombre
Mon printemps et mes beaux jours !
.....

Honte à toi ! tu fus la mère
De mes premières douleurs,
Et tu fis de ma paupière
Jaillir la source des pleurs !
Elle coule, sois-en sûre,
Et rien ne la tarira ;
Elle sort d'une blessure
Qui jamais ne guérira ;
Mais dans cette source amère
Du moins je me laverai,
Et j'y laisserai, j'espère
Ton souvenir abhorré !

われははじめて裏切りを教え、
恐怖と憤怒もて
わが頭を狂わせし

おんみに汚辱めれ！

不幸なる戀もて

わが青春と幸福の日を

暗中に葬りたる

無き眼の女、おんみに汚辱めれ！

.....

おんみに汚辱めれ！

おんみはわが最初の苦惱の母なるぞ。

おんみはわが眼臉より

涙の泉を湧かしたり！

安んぎよ、泉は流れて、

何者も濁らし得ぬもへし。

そは永遠に戀えしむ

傷口より流れ出せむなり。

ちれど、されはそが昔を泉に答みし

おんみが願はしを覆ひ出せ

せめて残しまらんとおなごなれ！

このおなごのしん・エス・イラをききすてしてから、
ニ

ノースは宥恕と忘却をすすめる鎮魂歌をもつて答える。

Poète, c'est assez. Auprès d'une infidèle,

Quand ton illusion n'aurait duré qu'un jour,

Nourrage p s ce jour lorsque tu parles d'elle ;

Si tu veux être aimé, respecte ton amour,

Si l'effort est trop grand pour la faiblesse humaine

De pardonner les maux qui nous viennent d'autrui,

Epargne-toi du moins le tourment de la haine ;

A défaut du pardon, laisse venir l'oubli.

Les morts dorment en paix dans le sein de la terre :

Ainsi doivent dormir nos sentiments éteints.

Ces reliques du cœur ont aussi leur poussière ;

Sur leurs restes sacrés, ne portons pas les mains.

詩人よ、な語りそ、よし不實な女の夢にて

おんみが夢は、一日にして破れたりして

彼女を語りしつゝ、そが目を辱かしむるな。

おんみ、もし愛を知ることを許せば、おんみが戀を奪へよ。

他人がなせし強を赦すは

可憐の人間にとりて、大をにすべし努力なりとて

せめて、人を怨恨の苦惱より自由を脱せよ。

宥恕す能はずとて、そを忘却せよ。

亡者は大地の懷に安らひて眠る。

われらが消えし感情も、またかく眠るべきなり。

感情が遺物にも骨片は在るなり。

そが聖なる貴物の上に手ぞつゝるななれ。

かくて詩人の「おんみに汚辱めれ」という絶叫は、
ニ

イズの「彼女を憐れめよ」のついでなり。

O mon enfant ! plains-la, cette belle infidèle,

Qui fit couler jadis les larmes de tes yeux ;

Plains-la ! C'est une femme, et Dieu t'a fait, près d'elle

Devenir, en souffrant, le secret des heureux.

.....
 Plains la ! son triste amour a passé comme un songe ;
 Elle a vu ta blessure et n'a pu la fermer.
 Dans ses larmes, crois-moi, tout n'était pas mensonge.,
 Quand tout l'aurait été, plains-la ! tu sais aimer.

おんみ、わが見て、過ぎし日、

おんみが眼より涙を流させしかの不實なる美女を憐れめよ！
 彼女を憐れめ！ そは弱き女性なり、神は彼女により、
 冥鳥のうち幸福なる者の秘密をおんみに悟らしめ給えり。

彼女を憐れめ！。そが悲しき戀は夢のじと過ぎ去りたれば。

彼女はおんみが痛手を知れど、そを癒し得ざりしなり。

われを信ぎよ、そが涙に濯われしなへては儂りにあひざりき。
 よし橋なりしとも、彼女を憐れめ！ おんみはいまも愛するこ
 とを知ぬ。

つらに詩人はシニユースの言葉を受け入れ、悲痛な心を抱
 抱つしもの「おんみが言葉は眞實なり、憎悪は神が御旨に叛
 くものなり」としう言葉やまらして救しを與えるのである。

Je te bannis de ma mémoire,
 Reste d'un amour insensé,
 Mystérieuse et sombre histoire
 Qui dormiras dans le passé !
 Et toi qui, jadis, d'une amie
 Portas la forme et le doux nom,

L'instant suprême où je trouble
 Doit être celui du pardon.
 Pardonnons-nous ; je romps le charme
 Qui nous unissait devant Dieu.
 Avec une dernière larme
 Reçois un éternel adieu.

われはいまやわが記憶より

この狂おしき戀の遺骸

人知れぬ悲哀の物語をば

過去にほうむりぢらん！

かくておんみ、過ぎし日、わが戀人なる

形と佳き名を負いたる者よ、

われおんみを忘らむこのいみじき瞬間に

着細の時とこそなむべけれ。

いづれ救し合はん——われは神の御前にて

われを結びしかの符呪をば裂かん。

最後の涙とともに、

わが永遠の別辭をうけよ

かくて、この詩は、最後に詩人の蘇生への言葉ととも
 に、リリスムの華となつて終るのである。

—Et maintenant, blonde rêveuse,
 Maintenant, Muse, à nos amours !
 Dis-moi quelque chanson joyeuse,
 Comme au premier temps des beaux jours.

Déjà la pelouse embaumée
 Sent les approches du matin ;
 Viens éveiller ma bien-aimée,
 Et cueillir les fleurs du jardin.
 Viens voir la nature immortelle
 Sortir des voiles du sommeil :
 Nous allons renaitre avec elle
 Au premier rayon du soleil !

——かくて今ぞ、ブロンダの夢の女よ、
 今ぞ、ミューズよ、わが戀しき人人よ、
 幸多かりし最初の日のように
 悦ばしや明を歌い聞かせてよ。
 はや香匂わしや芝草に
 黎明が近きは感ぜらる。

いんわが愛しき者を目覺めさせ、
 園生の花を摘みに來たれよ。
 いざ來りて不滅の自然の
 眠りの面紗より出てくるを見よ。
 さし昇る太陽のいち早き光に
 われら、自然とともに蘇生えらん

ミュッセは、「五月の夜」の中で「げにもはかなき絶望こそ、最も美わしき唄なり。あれは清き獻敬より生れたる不朽の詩を知る」と歌い、さらに「即興詩」という作の中で「涙もて眞珠を作る。現世の詩人の情熱はここにこそあれ。」

そが寶と、生命と、功名心とは「ここにこそ。」と歌っているが、彼にとつては自己の裏切られた眞實の心と苦惱とを、詩という一つの擴大鏡を通して眺めることがせめてもの心やりであつたのだ。ミュッセの深い苦惱は彼が詩の中で歌つてゐるよりもさらに深いものであつたのだ。彼は「自分の赤心を吐露し、直ちに讀者の肺腑をえぐり、共に泣き、共に喜び、共に嘆く」ということをしなければ、幼時から愛する友や戀人にしてしばしば裏切られ、人生に對する信頼を失い、さらにジョルジュ・サンドとの破綻にうちのめされてゐる彼として慰めがつかないのは當然のことであつたのである。そして、涙ながらに「われにはじめて裏切りを、教へしものに呪あれ！」と唄うのが精一杯の彼の藝術であつたのだ。

してみれば、ミュッセの後期の作品には、彼の處女詩集「スペインとイタリア物語」Contes d'Espagne et d'Italie) にはじまる前期の作品にみられる、激烈な熱情、冒險に富んだ官能的な、嗜みつくやうな鋭い才氣はみられない。「四季の夜」は詩人の二十代の作品でありながら、そこには、そのかみの大詩人、フランソワ・ヴィヨンの形見分けにみられるような若さの横溢はみられるべくもなく、そこには一抹の老衰の翳りの跡があつて、疲勞の影がふかいことを見のがしてはならない。

最後にミュッセを、同時代のローマン派の詩人と比較してみた場合はどうか？ 彼が敬愛した先輩ラマルティヌの作品をみると、同じく戀愛を出發點として生れた詩であり

(六四頁より續く)

ながら、その内容は全く異つてゐる。「取去つてくれ、執念深い思い出を、取去つてくれ、いつも睨みつづけるあの眼を」と歌つたミュッセと「エルヴィルよ、おんみは永遠に生きん」と歌つたラマルテイヌとは、二人が経験した戀愛から實を結んだ眞珠が本質的に違ふのは當然である。ラマルテイヌの経験したグラジエラ、そしてエルヴィルの若き日の戀愛は、その相手の死によつて、さらに淨化され、詩人の心に情愛のこもつた哀惜となつたかしい思い出のみを残した結果、彼等を哀惜する清純な詩となつたのに對し、ミュッセの歌つてゐるのは、青春の頃よりの戀愛の幻滅、裏切り、絶望、傷めつけられた自負心より生じた悲憤の叫びとなつてゐるのである。

しかも、自分の心の弱さを人に見すかされるのを好まなかつた、都會人としての見榮と矜持とを持つた彼は、自ら意識して、その詩の中には不遜、冷淡、無情とを裝つただつた。しかしながら、ミュッセの高い藝術の獨自性、彼を他のローマン派の詩人たちから區別させる存在價値は、ここにも十分に認めることができるのである。

(一九四九・八・一〇)

編集後記

新學制に伴い、本誌も一般教養科目を主眼とした文化特集を興味することを通日の總會で決定した。本誌はその試みの具體化である。

年六回の發行も正確を期すべく努力してゐる。

(さぐち)

昭和二十四年九月二十日印刷 早稻田商學 第八十二號
昭和二十四年九月二十五日發行 頒布價格 六拾圓

編輯兼 林 容 吉
發行人 東京都中野區上ノ原町三〇

印刷者 五十嵐 良 晃
東京都新宿區下落合一ノ一八

印刷所 祖谷印刷株式會社
東京都新宿區下落合一ノ一八

發行所 早稻田商學同致會

東京都新宿區戸塚町 一ノ六號七
早稻田大學商學部事務所内
日本出版協會B 11110031